

東京の教育

復刊第十三号

東京都教師会発行

(事務局) 横浜市区都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三二〇

会員の皆様へ

東京都教師会会長 佐藤 健二

会員の皆様には、平成最後のお正月を恙なくお過ごしになられたことと、お慶び申し上げます。

さて、この復刊「東京の教育」も回を重ね、昨年十一月で十二号となりました。その間、発行に関わる費用は以前の繰越保管金で遣り繰りしてきましたが、いよいよその保管金も底を突きつつあります。そこで、この度新たに会費を徴収させて頂くことにいたしました。

また発行回数も、今までの隔月から三ヶ月

おきの年四回にさせて頂きたいと存じます。例会が開かれない現在、唯一会員の絆となっている本紙の継続に、寄稿も含めて、今後とも宜しくご支援、ご協力をお願いいたします。

なお、会費の徴収は銀行振込みで、年額二千円という事で、お願いいたします。

口座は、佐藤健二名義で、みずほ銀行港北ニュータウン支店、店番号743、普通預金口座1330150。この口座は、私が東京都教師会の仕事をするために開設したもので、現在の残金は、一万五二三円です。

或る高校の卒業式にあつたこと(一)

藤井 雅和

昭和五十一年三月七日、東京都北多摩地区の或る都立高校で卒業式が挙行された。そこに到るまでの卒業生(三年生)生徒の動静の概略である。

昭和五十年年度の十二月、三年生の数クラスから生徒の卒業準備委員会に要求があつた。それは、卒業式次第に、国歌(君が代)斉唱を入れること。式場に国旗(日の丸)を掲

揚すること。「賛歌」を卒業式で在校生に歌つて貰ふこと、といふ三点である。この「賛歌」といふのは、前年度の卒業式でこの学年が歌つて上級生を送り出したといふもので、今度は自分らも歌つて送り出してほしいといふことであらう。

この要求を重視した委員会は、学年の全生徒を対象に賛否を調査した。その結果、国歌斉唱については賛同が得られなかったが、国旗掲揚については賛成百五十九、反対百四十四、棄権十七と、十五票差で賛成が多数となった。また「賛歌」については大多数の賛成

を得られた。

委員会は、この結果に基づき会場内の国旗掲揚と在校生による「賛歌」合唱を求めて、三年生の担任団を通じて学校側に申し入れた。

翌一月中旬、学校側の職員会議はこの二項目の申し入れを多数意見として否決、その旨を生徒側に通知した。その二日後、生徒側委員会はこれを受けて、委員の辞任、委員会の解散を決定した。生徒の希望が叶へられなかった引責といはれてゐるが、学校側への抗議もあつた模様である。

職員会議が否決したのは、国旗掲揚については、式場内では前例がないといふことと、棄権票を加へると反対票の方が上まつてゐるので三年生の総意とはいへないといふ理由である。「賛歌」については、学年末の大事な時期に一、二年生に負担をかけてはいけないといふものの他、前年実施したとき当年度限りだといふ約束があつたといふことで、ここでは三学年生徒には前年度以来全く知らされてゐなかつた「約束」が理由として出されてきてゐる。

委員会の解散後、数名の生徒が学校側に抗議して「卒業式正常化有志の会」を結成、署名活動や抗議びらの配布を行つた。内容は、職員会議の否決理由の明示説明と再審議を要求するものであつた。しかし、これに対して学校側は校内放送を用ゐて反論するなどをし、一月三十一日には、生徒側がこれにこれ

以上の混乱は望まないといふ決断をしたことで、生徒側に理解を示し実現に努力をした三学年担任団に感謝しつつ行動を中止した。実は翌二月一日より受験前の三学年自宅学習期間に入り、三年生の一般生徒の登校がなくなるので活動できなくなるといふことがあつたため、いはば学校側が時間稼ぎに成功したといふ形である。

この一連の出来事は、サンケイ新聞（現産経新聞）が三月七日の同校卒業式当日の朝刊社会面で大きく取り上げて報道し、世間に知られることとなつた。記事は国旗掲揚のことが中心で、生徒側学校側の双方に取材をしてゐる。

高校卒業式のそれまでの動向は、昭和四十五年の日米安全保障条約（安保条約）改定の際の世の中の動きに始まる。安保条約に反対する勢力が過激化してゆき、各地で騒動を起こした。学校関係で言へば、昭和三十五年の時の反安保行動がぶり返し、「学生運動」が激しくなつていつたことである。それを主導したのは、隠然と裏で操つてゐた勢力とそれに操られた、「全学連」「全共闘」と呼ばれた組織である。この連中はご多分に漏れず細かな派閥に分かれて互ひに内部抗争を繰り返しながら、全体として世の中に反抗するといふ動きであつた。従つて、各地の大学等で様々な動きを見せたが、それぞれがどういふ派閥なのかは判然としない部分がある。所謂「何々派」といふ名称で、学内のみならず街頭で

も暴力を繰り返す集団としてとらへられ、その上層部はすでに学生とはいへず、殆ど専門的な戦闘集団であつた。

それらが勢力拡大のため、高校生を巻き込み始めた。所謂「大学紛争」が高校生にまで低年齢化し「高校紛争」になつたのである。

さうして、全国各地の高校で卒業式の妨害行動が顕在化した。大阪府や京都府では総代が用意された卒業生答辞をすり替へて読んだり、広島県では卒業証書を壇上で破り捨てたりなどの事件を起こし、その数五十校以上といはれる。

東京都では、昭和四十四年三月、二十三区西部の都立高校で、卒業式当日の早朝、数十名のヘルメット覆面姿の集団が角材を持つて押し入り卒業式式場に乱入、内部を破壊した上校長室に立てこもり、結局警官隊が出動し六人を逮捕して制圧するといふ事件を起こした。しかしこの事件では、手引きをした同校生徒はゐたものの、大多数が部外者であつた。このことは、「高校紛争」がどのやうなものであつたかを物語つてゐる。

また、翌日には同じく二十三区中央部の都立高校で、卒業式の最中に三十数人が壇上を占拠、これを制止する一般生徒と乱闘となつた。式は中止され、妨害者やそれに雷同する生徒とそれを支へる一部の教員が「自主卒業式」を行つたといふ。

この他、同年前後にはいくつもの同様の事件が引き起こされ、「荒れる卒業式」などと

揶揄されるに到つた。

（次号二続く）
（会員）

戦前の中学国語の教科書を読む（八）

「次の文章は、前回に引き続き八波則吉編著『現代国語讀本 卷二』（昭和十年版）からである。漢字は原文通り正字にしてゐるが、ワープロで正字が出ないものは、今の書体にしてある。送り仮名は原文通り、読み仮名は、いくつか新たに加へた。」

新年 芳賀 矢一

暦の改まると共に人は一歳づつ年を取るものであるが、實際はその度に生れ變つて若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧みれば、人の行爲には缺點もあり失策もある。それを何時までもくよくくしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが處世の良法である。そして、その好機は即ち年の改まる日である。

我が國には、昔から大祓おほはらといふ祭式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄うちすてて復活するといふ風習がある。是は六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心身共に新に

なつて、復活きふたつ來つたのである。この大祓なかつの式は今でも行はれてゐる。就なかつ中十二月は年も新になる前であるから、この復活の儀式が盛大に且嚴格に行はれるのである。

そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に出来るだけ一切の物を新にし清くして、形の上にもこの復活の義を表すことに努めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還暦に入り古稀に達する老人でも、その生れ變る心持には異なるところがない。

正月の儀式は太古の質素・簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩しめなは、交譲木まはらぎや、白木の三方や、土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返して行くところに妙味がある。即ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出して行くのである。祖先から傳はつた掛物を掛けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

我が國民の宗家と仰がれたまふ皇室に於ては、我等が一家に於て家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、また内外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさせられ、御宴を賜ひなどしたまふ。これを思へば、我等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずにはゐられぬ。余は、橘曙たちばな覽らんの、

春にあけてまづ見る書も天地の始の時と
讀みいづるかな

といふ歌を早くから深く感心してゐた。これ、

元朝げんてうや神代かみよのことも思はるゝ
と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬのである。

(原注)

芳賀矢一 福井市の人。國文學者。文學博士。

昭和三年歿。年六十一。

元朝や 荒木田守武の句。守武は伊勢内宮の祀官。連歌師。天文十八年(二二〇九)歿。年七十七。(編集者注) 二二〇九は、皇紀。西暦一五四九年。

(編集者注)

橘曙覽 江戸末期の歌人。國學者。福井の人。西暦一八六八年没。五十七歳。

天地の始の時 『古事記』冒頭の一句。つまり、新年最初に読む本は『古事記』であり、新年を迎へるといふのは、その天地の始めの時を迎へると同じだといふのである。

計報

草開省三先生

本会会員草開省三先生が、昨年平成三十年十二月三日、他界されました。享年九十歳でした。

先生は、日本教師会草創期からの会員であり、東京の会員として我々後進に対して熱心に御指導して下さいたのは言うまでもないのですが、さらに教師会から飛び出して、大きな足跡をお残しになりました。それは日台(日華)交流教育會と日韓教育文化協議會の設立

に、名越二荒之助先生と共に、大きな役割を果たされたことです。この二つの国際交流教育會は、特に事務局を担当された草開先生の御尽力なくしてできなかったものです。台湾、韓国といった日本と歴史的にも強い繋がりのある国の先生方と胸襟を開いて直接話し合うことが、これからの教育を考える上でいかに重要なことであるか、それを身を以て教えて下さいました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

田中卓先生

平成三十年十一月二十四日、他界されました。享年九十四歳。叙四位勳三等瑞宝章。歴史学。皇學館大学元学長。同大学名誉教授、など様々な経歴をお持ちです。

先生は長年会長として日本教師会を支えてこられました。日本教師会はそれまでの全国各地の教育研究協議会や教育正常化団体が結集して昭和三十八年二月に結成され、初代会長に田中先生が就任され、それ以来多年に亘り日本教師会の発展に尽くしてこられました。その結成大会席上での田中先生の挨拶を再録し、当時の日本教師会の様子や先生を偲びつつ、ご冥福をお祈り申し上げます。

「日本教師会の発足に当つての挨拶」

会長 田中 卓

昨夜来の雪はいまも降りしきつていますが、寒さについての御参会をあつくお礼申し上げます。ところで私が勤務地の伊勢をたちます時、はす梅の花が一輪二輪とほころびは

じめていました。およそ梅の花は、きびしい寒さにたえ、春にさきがけて花を開きますので、古来、百花の魁(クワイ)とたたえられてきました。一葉落ちて天下の秋を知るといわれますが、私どもは一輪の梅に、また天下の春を知るのであります。

わが日本教師会も、きびしい苦難の道を歩みつつけて、いまようやく、他にさきがけて一輪の花を咲かせようとしております。そしてこの花こそは、すなわちこの結成大会これは、恐らく、戦後の教育界の混乱に重大な反省を求め、教育の正常化に決定的な礎(いしず)えをおくことになると思います。

戦後十八年、人の心も落ちつきをとりもどし、敗戦の精神的痛手を回復して、今日この日を迎え得ましたことは、まことにご同慶のいたりであります。多年この教育救国運動に挺身せられてきた会員各位の、高い識見と強い勇氣に、心より敬意をささげるものであります。

ところで、私どもの研究団体に対しましては、従来、一つの批判がなされてきました。なる程、教育の正常化は結構であり研究活動は必要であるが、教師も人間であり、霞を喰って生きてゆけないではないか、生活面を考えてもらいたい、というのであります。もとより私どもも「衣食足つて礼節を知る」という言葉を知っております。それ故に、今後は、この教師会において、衣食も足るべく、教師の身分の確立や福利厚生面についての対策も

充分に考えてゆくつもりであります。この点は本会の基本方針にきめられている通りであり、教師会の特色の一つであります。

しかし、同時に考えねばなりませんことは、「衣食足る」のは何のためか。いうまでもなく「礼節を知」らんがためであります。目的は礼節にあり、衣食の足るに手段にすぎない。礼すなわち、礼儀・節義を明らかにすることこそ、一切の根本であります。教育の眼目は、人間としていかに生き、いかに歩むべきかという人間の道、道徳を明らかにして、その実践を教えることにあると信じます。私ども教師としましては、自ら求めて、教師たるの道、教師道を明らかにし実践して、国民の期待に応えたいと考えます。この教師会が、福祉面をとりあげながらも、教育研究団体の旗じるしを高くかかげていますのは、この教師みずからの研修を通して教育の正常化をはかるという精神を堅持するが故であります。

また私どもは、決して特定の団体に反対することを主張として結成された集りではありません。もとより、生徒を教える教師である以上、革命思想を煽動するような団体の会員は、左右を問わず、席を同じうして語ることには許されません。本会に入会の条件として、革命思想団体に加入するものは、色メガネをはずしてからにしてもらいたいと要望いたします。しかし、私どもは、特定の団体に反対するよりも、自らの目標に向って前進することを常に考えています。太陽中天にかかれば、

一切のものはその影を没します。今日は夜明けでありますので、影も長く尾をひいていますが、形におびえず、影を相手とせず、太陽を仰いで自らの道を進もうではありませんか。太陽中天にかかる時こそ、日本教師会の花が、実を結ぶ時であります。

しかし、申すまでもなく、私どもに課せられた任は重く、道は遠いのであります。温い友情ときびしい切磋で、今日のこの初一念をつらぬくことができますよう各位の御協力とご鞭撻をお願いしてやみません。

(文学博士)
(昭和三十八年二月五日付「日本の教育」より、記事原文のまま)

お願い

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

字数は三千字程度以内でお願いします。ただしこれより長いものは数次に分けて掲載することもできます。

仮名遣いは古典現代いづれかに統一して下さい。また、写真や図版はご相談ください。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス (佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp